

すてきな大分を見つけ、伝えよう！

重光葵（まもる）講話会ご報告

このところ朝晩は、すっかり涼しくなってきました。皆様お元気でお過ごしのことと存じます。9月の講話会は、先哲史料館の松原勝也先生をお迎え致しまして、大分県の偉人「重光葵」について学ぶことが出来ました。重光葵の生涯を振り返り、その中でも特に生まれ育った環境や若い頃の夢や苦悩等にスポットを当てられ、お話をして下さいました。

《感動したお話》

① 子供の育成に全力を注がれた家庭環境に育つ

家は決して豊かではありませんでしたが、両親は、教育を大切に考え、葵を含む男の3兄弟だけでなく、娘3人も高等学校に進学させた程でした。当時の女性の進学率は、約5%でした。そこには、父親（直愿なおまさ）の女性教育の大切さへの見識とともに母親（松子）の献身的な家計の支えもありました。

このような親の姿を見て育った子供たちは、兄弟仲が良く育ちます。17歳の頃、葵は、進路選択に悩み、「自分は文才が無い。法科は向かない」と兄の藤（あつむ）に手紙で打ち明けます。兄は「文才が無いため法科をやめることは最もの様だが、本来法科は文才が第一要素ではない。」と再考をうながし、「葵は、決して法科が適さないとは思わない。今一度熟考しなさい」と返信しています。この兄の勇気づけは、決定的な要素となり、葵は、法科を選択して、7年後の外交官重光葵の誕生に繋がったのでした。

② ヴェルサイユ条約調印参加と後進の育成

31歳で、重光はヴェルサイユ講和条約調印（1919年）に立ち合います。日本は、自国の要求を出し主張しましたが、関係しない問題について、殆ど発言をしませんでした。これを、欧米諸国から「サイレントパートナー」と揶揄（やゆ）されたのでした。この初の国際舞台で、重光は、日本外交の弱さを痛感したのでした。この経験は、重光の外交官人生の転機となります。若手外交官の育成強化と外務省改革の推進に繋がったのです。更に重光の偉さは、母校杵築中学（現杵築高校）にこのヴェルサイユ条約関係書類を、翌年（1920年10月）に寄贈したことです。ここには、国際舞台に初めて臨んだ手応えとともに後輩への激励、「君たちも頑張れ、世界に出て羽ばたけ」との強いメッセージも込められていたことでしょう。

晩年のことですが、重光は、1956年12月国連加盟の責任を果たし帰郷します。母校の在校生を前に講演され、「四海を志せ」（写真：杵築高校所蔵）との言葉を贈り、その10日後に他界されたのでした。（注：「四海」…四方の海、天下、世界）世界も日本も最も困難な時代を、外交官、政治家として立派に生き抜いた重光葵が遺したこの言葉は、これからの未来を引き継ぐ若い世代に繋がっていききたいものです。

以上

2023. 9. 12

一般社団法人すてきな大分を伝える会
青井勝久

